

卒業

春は異動シーズンである。組織で働く人には人事異動で一喜一憂する季節でもある。大人の世界もさることながら、子供たちにもこの時季は、卒業、入学という節目の時となる。いずれの場合も、言い換えれば別れと出会いのシーズンということになる。

古くから「会うは別れの始め」といわれるが、私はこれをもじって「別れはまた会う日の始め」とつけ加えている。この「別れと出会い」は、人と人ばかりでなく、過去と現在という時間の関係であったり、種子が芽生え成長しやがて花が咲き、そして実がつきという自然界の循環過程のことであつたり……と様々な事象にあてはまる。時の秒針は止まるを知らない。常に現在は一瞬であり過去を増やしながら未来へと進んでゆく。過ぎ去つた時間は取り戻せない。しかし、思い浮かべることが出来る。これが、「また会う」ということである。

“ 年ごとに 咲くや吉野の桜花 樹を割りてみよ 花の在処を ”

これは私の好きな句の一つである。真冬の時期に花を求めてもその姿はどこにも見つからないが、時至れば花は現れるもの。散つた花が別れならば、咲いた花は出会いである。

過去と未来は、現在地点から視線をどっちに向けるかによる。過去に向ければ思い出の世界となり、未来に向ければそれは夢の世界となる。シーソーのように、どうバランスをとって生きるかの問題であろう。

別れと出会い、どっちが先か後かが問われるだろうが、「別れの始め」ではなんとなく寂しい気がする。それより、「また会う日の始め」という可能性を秘めた言葉のほうが私は好きである。

さて、視線を過去に向けてみることにする。

小学校での卒業式のときだった。

私は卒業生代表として挨拶することになった。私の学年は、戦争の影響で、最も人数が少なく四クラスしかなかった。

「……私たち卒業生一九六名のために、このような立派な卒業式を挙げていただき誠にありがとうございまして……」

今でもこの文句だけは覚えていられる。在校生代表の「送辞」に応えた私の「答辞」の一節である。

私は、元来喋り下手で、その上、人前に出ると赤面する「あがり症」だった。そんな私に代表挨拶の役が回ってきたとき、一番心配したのは、担任の先生だったらしい。

私も、きちんと読み上げることが出来るかものすごく不安であつた。家で何回も練習した。だが、不安は治まらず、

そこで、薬局に勤めていた姉に「あがらない薬」はないかと頼みこんだ。卒業式前日、「これを飲めば絶対大丈夫」と言って姉はあがらない薬の錠剤を渡してくれた。

当日朝、その薬を飲み学校に向かった。

卒業式は、父兄・四年生？以上の在校生を含めて多分八百名くらいの人数だったと思う。やがて在校生代表の挨拶が終わり、続いて私の出番がやって来た。薬の効果はてき面だった。順調にことは進んだ。自分でも不思議なくらい落ちついて読めたと感じていた。そこに、お世辞にも友人の親から「上手だったよ」と言われホッとしたものだった。しかし、これは本来の自分の力ではないことは確かである。少しばかりの自尊心を維持するため、誰にも「あがらない」薬を飲んだことは内緒にしていた。

中学へは、学区が一緒であるため、全員が同じ中学校へ入学した。そして三年後訪れた卒業の時を経て、幾つかの高校へそして就職先へとそれぞれ道は別れた。

時は流れ、四十四年後の平成十七年九月、元紅顔の美少年、校庭に花を咲かせた美少女およそ八十名が集い還暦の会を催した。中学卒業後、初めて見る顔もかなりの数にのぼった。年輪を重ねた風貌や話しぶりから、各人それなりの人生ドラマを体験してきたことがうかがえた。それにも増して、幽明界を異にした者は十九名にのぼることに衝撃を受けた。

話が小学校の卒業式に及んだ時、私は初めて、あがらない薬を飲んだことを打ち明けた。そして、その薬が、単なる栄養剤だったことも。私自身そのことを知ったのは、あの卒業式以来、十年以上も経ってからのことだった。姉も私に尋ねられるまで口にしておらず、と言うよりも無頓着だったようでひよんなことから、「ああ、そんなこともあったねえ。実はあれは……」と思いついて笑っていたのだった。

後ろ髪引かれながらも還暦の会はお開きとなり、今度は「古希の会」かと言いつい合いながら三々五々会場を後にした。卒業という言葉を聞くと、晴れやかな気持ちと共になんとなくもの悲しい情景が浮かび上がる。それは、卒業式のあの「蛍の光」や「仰げば尊し」のメロディからきているのかも知れない。今ではほとんど歌われていないらしいが、社会情勢の変化がそうさせているのだろう。少し残念な気がする。

卒業は、これでお終いではなく新たなスタートの起点である。これからも、まだまだ別れと出会いは続くことだろう。このことが喜怒哀楽を包み込んだ心のヒダに適度な潤いとしてしみ込み、人生にうま味を与えてくれるものと思っている。